

第四次千曲市総合計画策定に向けた市民ワークショップ 実施結果報告

1. 開催の目的

- ワークショップの開催を通じ、市民の感じている市の課題感や意向等を把握するとともに、市民が市政への興味・関心を持つきっかけとすることを目的に実施しました。

2. 実施概要

■ 対象

- 千曲市在住者および千曲市に通学・通勤している中学生以上の方

■ 募集方法

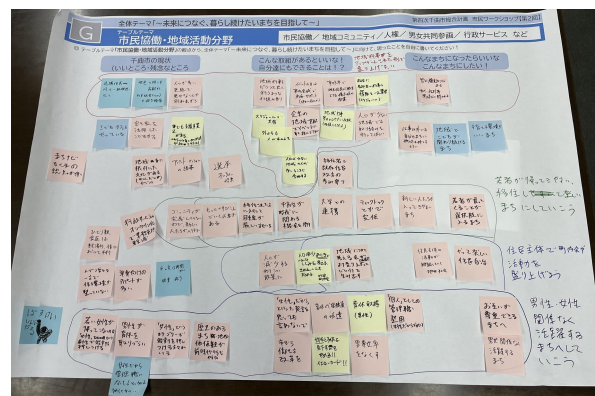
- 市ホームページ、公式SNS(LINE 等)、市広報による告知

■ 各回の全体テーマおよび開催日時等

	第1回	第2回
テーマ	みんなで描く、10年後の理想の千曲市 (将来像や横断的な目標など 方向性の検討材料等につながる意見収集)	未来につなぐ、暮らし続けたいまちを目指して (さまざまな政策分野における具体的な課題・ 施策の検討材料等に係る意見収集)
日時	令和8年6月27日(土)10:00～12:00	令和8年7月5日(日)10:00～12:00
参加者数	23名	25名
場所	千曲市役所1階 ガレリア、マルチルーム	

■ その他

- 会場の一角に託児コーナーを設け、子ども連れでも参加しやすい工夫をしました。



3. 第1回ワークショップ結果

■ トークテーマ

- ① 紹介して！「千曲市ってどんなところ？」
- ② 「10年後、こんな千曲市だったらいいな」
- ③ 「こんな千曲市になるために、私ができることは？」

① 主なポイント

○ 千曲市の強みや現状について

- ・ 千曲市の強みとして、温かい人のつながり、子育てを支える地域の雰囲気、棚田・温泉・あんず・歴史文化・自然景観などの地域資源、買い物や広域アクセスの利便性が多く挙げられました。
- ・ 一方で、少子高齢化や若い世代の流出、子どもや若者の居場所不足、公共交通や道路網の課題、地域活動の担い手不足、市民が集い交流する場の不足なども指摘されました。

○ 目指すべきまちづくりの方向性について

- ・ 上記の現状を踏まえ、まちづくりの方向性として主に以下の方向性に関する意見が出されました。

「子どもが安心して育ち、地域とともに学び・活動できるまち」

「誰もが安全・安心に暮らし、互いに支え合えるまち」

「姨捨の棚田・温泉などの歴史・文化・自然を守り、生かすまち」

「若い世代が集まり、ふるさとへ戻りたくなるまち」

「市民が集い、交流し、にぎわいと誇りを生み出すまち」

「買い物や移動がしやすく、暮らしの利便性と広域アクセスを生かせるまち」

「変化を見据え、市民の声を生かしながら持続的に発展するまち」

○ 市民ができることについて

- ・ 上記の実現に向け、市民自らが地域行事や防災活動、子育て支援、公共交通の利用、地元での買い物、歴史文化の学び、地域資源の発信、まちづくりへの参加などに関わっていくことが重要であるとの意見が出されました。

② 主な意見のまとめ

目指すまち	現状や課題	目指す方向性や市民ができること
子どもが安心して育ち、地域とともに学び・活動できるまち	・地域で子どもを育てる雰囲気がある ・地域の方が学校に協力的 ・公園が多い一方で屋内の遊び場がない ・小中高校生が過ごせる場所が少ない ・病児保育が預けにくい ・子どものクラブ活動の、地域での受け皿がない	・0歳から小学校低学年が遊べ、ワンストップで困りごとが相談できる場(総合複合施設) ・学校が地域のプラットフォームになる ・子どもが帰ってきたいと思えるまち ・子どもが好きなクラブ活動をできる環境整備 ・【市民ができること】子育て情報の発信・同土を募る、地域クラブ活動へ保護者参加、子育てボランティア など
誰もが安全・安心に暮らし、互いに支え合えるまち	・近所の人優しい ・地域コミュニティのつながりがある ・程よく田舎で、近所づきあいが重すぎない ・少子高齢化の進行 ・地域活動や子ども支援活動の継続不安	・誰もが安全・安心に暮らせるまち ・行政と地域のつながりが強く、地域内で助け合うまち ・【市民ができること】防災訓練への参加、消防団員の増加、地域の声・要望に耳を傾ける、気軽に困りごとを助け合えるサービス など
姨捨の棚田・温泉などの歴史・文化・自然を守り、生かすまち	・姨捨の棚田、月の都、県立歴史館、森將軍塚、科野の里、戸倉上山田温泉、森のあんず、自然・景観など、千曲市ならではの地域資源 ・歴史や文化が日々の生活で感じられる ・自然が豊かで景観が良い	・今ある歴史や文化を引き継ぎ、自然・景観を残していく ・棚田を守り活用する ・温泉街に活気を生み出す ・誇りに思える千曲市、ならではの魅力を市内外に発信 ・【市民ができること】地域の歴史を知る、棚田の良さの発信、棚田で稼ぐ、地元行事への参加、家の花壇や家庭菜園の整備、共同農地による交流創出 など
若い世代が集まり、ふるさとへ戻りたくなるまち	・少子高齢化の進行 ・大学・専門学校がない⇨清泉大学農学部ができる ・地元で働く場所 ・土地が比較的安い ・社会増や若者流入への期待	・子どもが帰ってきたいと思えるまち、大学卒業後、戻りたくなるまち ・若い人が集まり活躍できるまち ・魅力ある就労場所がたくさんあるまち ・【市民ができること】若い世代のコミュニティづくり、若者が来たくなる空き家リノベーション、市内の施設・企業の魅力発信、若い世代の意見に耳を傾けること など
市民が集い、交流し、にぎわいと誇りを生み出すまち	・日常的に市民が集まれるお店がない ・公共施設や遊休空間を十分に活用できていない ・活動できる場が少ない、予算がない ・一方、町を良くしようとする人が多いとの意見も	・地域の方、多世代がつながれる賑わい・活気のあるまち ・市民のシンボルとなる複合的な場 ・屋代駅前を元気に ・千曲市としてのブランディングや「誇り」に結びつく発信 ・【市民ができること】地元のお店に足を運ぶ、地元行事への参加、自分でイベントを実施する、千曲市の情報発信、Xで市の投稿をリポストする など
買い物や移動がしやすく、暮らしの利便性と広域アクセスを生かせるまち	・買い物に困らない ・スーパーやドラッグストアが多い ・都内まで日帰りできるなど交通アクセスがよい ・交通の要衝だが生かし切れていない ・車社会、駐車場が狭い ・子どもたちの移動手段が不足	・現状の買い物利便性を維持 ・子どもだけで移動できる交通機関 ・交通利便性の向上、姨捨スマートICの上下完成、都市計画道路の早期実現 ・【市民ができること】公共交通・バスを積極的に使う(通勤利用促進)、近所で買い物する など
変化を見据え、市民の声を生かしながら持続的に発展するまち	・人口減少やテクノロジーの進化、気候変動を見据えた戦略的なまちづくりが必要 ・新しい働き方、コンパクトなまちづくり、資源活用への意識などの必要性	・人口減少、技術の進展、気候変動などの変化を見据え、市民の意見や地域資源を生かしながら、まち全体の方角性を分かりやすく共有していく ・【市民ができること】まちづくりに参加する、意見を伝える、CO2排出量の削減

4. 第2回ワークショップ結果

■ トークテーマ

各テーブルに設定したA～Gの政策分野ごとに「千曲市の現状(いいところ・課題)」、「こんな取組があるとよい!?自分たちもこんなことができるかも!?」、「こんなまちになってほしい!こんなまちにしたい!」といった観点から、意見を出し合う

※セッションごと自由にテーブルを移動するワールドカフェ形式にて実施

① 主なポイント

A 生活環境・都市基盤分野

- ・ 駅前のにぎわい不足や、車がないと移動しにくいこと、公共交通でカバーしきれない地域があることが課題として挙げられました。一方、首都圏へのアクセスや高速道路網の利便性、道路整備の進展は強みとして認識されています。
- ・ 今後は、駅前や空き店舗の活用、二次交通の充実、防災意識を高める体験型の取組などを通じて、若者や来訪者が集まり、誰もが安心して暮らせるまちづくりが求められています。

B 子育て・学び・スポーツ分野

- ・ 公園や地域学習の取組、清泉大学の開設などが評価される一方、乳幼児親子が長く過ごせる屋内施設、小学生の長期休暇中の居場所、中高生の活動・学習の場が不足しているとの意見がありました。ファミリーサポートの担い手不足や、部活動の地域展開に伴う送迎・活動場所の課題も挙げられました。
- ・ 子どもの成長段階に応じて、遊び、学び、地域参加、スポーツの選択肢を広げる環境づくりが求められています。

C 健康・医療・福祉分野

- ・ 病院へのアクセスの良さや公園などの健康づくりの場があることが評価される一方、高齢者の通院・買い物などの移動手段、小児科等の利用しやすさ、ひきこもり支援や介護人材不足が課題として挙げられました。
- ・ 今後は、乗合タクシーやライドシェア等を含む多様な移動手段、地域で高齢者を見守り交流できる場、子どもから高齢者まで健康づくりに取り組める公園・運動施設の充実が求められています。

D しごと・観光・移住定住分野

- ・ あんず、棚田、温泉、古墳、祭りなど多様な地域資源がある一方、「千曲」の認知度や資源のPR不足、棚田の担い手不足、地域でお金が落ちる仕組みの不足が課題として挙げられました。
- ・ また、若者が戻りやすい働く場や、小商い、兼業・複業、リモートワークなど多様な働き方への期待も出されました。地域資源を生かしたブランドづくり、観光・農業・移住・働き方を結びつける取組が求められています。

E 歴史・文化芸術分野

- ・ 古墳、日本遺産、県立歴史館、北国街道、祭り、食文化、温泉文化など、豊かな歴史文化資源がある一方、市民に十分知られていない、資源が生かされていないという意見が多く挙げられました。
- ・ 今後は、子どもから大人まで地域の歴史文化を学び、誇りを持てる機会を増やすとともに、体験型観光、ツアー、市民ガイド、SNS等を活用した発信により、歴史文化を暮らしや観光と結びつけていくことが求められています。

F 自然との共生・循環型社会

- ・ あんずの里、棚田、生き物、山並み、千曲川など、身近に豊かな自然があることが強みとして挙げられました。一方で、あんずや田畑の担い手減少、公園や遊具の不足・老朽化、ごみ出し当番の負担、森林整備の必要性などが課題として挙げられました。
- ・ 自然環境を守りながら、子育て世代や子どもが保全活動に関わる仕組み、公園・緑地の活用、有機農業や家庭菜園を通じた循環型の暮らしづくりが求められています。

G 市民協働・地域活動

- ・ 近隣住民同士の距離の近さや地域ごとの文化、子どもカフェなどの取組がある一方、地域活動の担い手の高齢化、行事の減少、移住者の入りにくさ、まちナビちくま等の認知不足が課題として挙げられました。また、性別による役割の固定化や男性の育休取得のしづらさなど、誰もが尊重される地域づくりに関する意見も出されました。
- ・ 人口減少を前提に地域活動を見直しつつ、新しい人、若者、子どもが関わりやすく、男女を問わず活躍できる住民自治の仕組みづくりが求められています。

② 主な意見のまとめ

A 生活環境・都市基盤

駅前・拠点周辺のにぎわいづくり	- 駅前がさみしい、駅利用者が少ない、空き店舗があるといった課題が挙げられた。 - 空き店舗の活用や駅前周辺の魅力づくり、清泉大学周辺の出店、祭りなど人が集まるきっかけづくりにより、若者や来訪者にとって魅力あるまちを目指す意見が出された。
車がなくても移動しやすい交通環境	- 車がないと移動しづらい、高齢者の移動手段がない、公共交通でカバーしきれない地域があるとの意見があった。 - バス路線の見直し、二次交通の強化、駅から主要施設への送迎、月額乗り放題など、日常的に使いやすい移動手段を求める声が出された。
防災意識と安全・安心な暮らし	- 台風による洪水被害や、防災訓練に若者があまり参加しないこと、防災情報が市民に浸透していないことが課題として挙げられた。 - 千曲川を使った防災訓練体験や、日頃から備える意識づくりを通じて、心配ごとなく暮らせるまちを目指す意見が出された。
広域交通の利便性を生かした拠点形成	- 首都圏へのアクセスや高速道路網の利便性は強みとして挙げられた。 - スマートIC周辺やデルモンテ跡地周辺での道の駅、ショッピングモール、買い物施設等を求める意見が出され、広域交通の強みを生かした交流・商業拠点づくりへの期待が示された。

B 子育て・学び・スポーツ

子どもと保護者が安心して過ごせる居場所	- 公園はある一方で、大きな公園や屋内で遊べる施設、昼食も取れる滞在場所が少ないとの意見があった。 - 乳幼児親子が過ごせる場所、小学生の長期休暇中の居場所、休日にも利用できる支援センターなど、子育てしやすい環境を求める声が出された。
中高生の学び・活動・地域参加	- 中学校・高校でのフィールドワークは良い取組として評価され、地域のことを学ぶ機会や、中学生が地域で関われる場所を求める意見があった。 - 職場体験、学習スペース、高校生向けの塾など、子どもが成長段階に応じて選択できる環境を望む声が出された。
子育てを地域で支える仕組み	- ファミリーサポートの受け手不足や、送迎を気軽にお願いできる関係づくりが課題として挙げられた。 - ファミサポのアプリ予約、地域の世話役、相談できる場所など、子育てを家庭だけで抱え込まない支援の仕組みを求める意見が出された。
スポーツ・学習環境の充実	- 部活動の地域展開に伴う送迎や活動場所の課題、屋外スポーツ施設や体育館の整備を求める意見があった。 - 千曲市といえばというスポーツ種目、戸倉体育館の新設、夜遅くまで使える学習スペースなど、子どもや若者の活動の選択肢を広げる意見が出された。

C 健康・医療・福祉

高齢者等の移動支援と生活のしやすさ	- 病院へのアクセスの良さは評価される一方、高齢者の通院・買い物、デマンドタクシーが全地域を網羅していないこと、送迎の問題が課題として挙げられた。 - タクシー補助券、乗合タクシー、ライドシェア、カーシェアなど、多様な移動手段を求める意見が出された。
医療を利用しやすい環境	- 大きな病院があることは強みとして挙げられた一方、小児科等の少なさ、予約の取りにくさが課題として示された。 - 予約しやすい仕組みや、土日にも利用しやすい医療環境、通院しやすい交通手段を求める声が出された。
孤立を防ぐ支援と多世代交流	- ひきこもり支援ができる人の少なさ、一人暮らし高齢者の買い物、介護人材不足が課題として挙げられた。 - 高齢者が地域の人と交流できる場、隣近所で高齢者に関心を持つ人を増やすこと、ひきこもりの方等への生活支援の向上を求める意見が出された。
自然・公園・運動施設を生かした健康づくり	- 公園が整備されていることや、自然を生かした健康づくりへの期待が示された。 - 大きな公園、散歩・ランニング、子どもが体を動かせるアスレチック、体育館や総合スポーツ施設、温泉を生かした療養施設などを求める意見が出された。

② 主な意見のまとめ

D しごと・観光・移住定住

地域資源を生かした千曲市のブランドづくり	・ あんず、棚田、温泉、古墳、祭り、歴史資料館など多様な資源がある一方、「千曲」の認知度やPR不足が課題として挙げられた。 ・ 既にある資源を拾い上げ、千曲市としてのブランディングを進めることや、尖った強みをめざす意見が出された。
棚田・農業の継承と関係人口づくり	・ 棚田の担い手不足、景観維持、棚田オーナー制度を支える仕組みが課題として挙げられた。 ・ 稲作体験会、農業サポーター、移住と棚田をつなげる取組、棚田でお金が落ちる仕組みなど、農業・景観保全と関係人口を結びつける意見が出された。
若者が戻り、多様に働ける環境	・ 工業系企業が多い一方、就職先としての選択肢や若者が戻りやすい環境を求める意見があった。 ・ 小商い、兼業・複業、リモートワーク、2拠点生活、繁忙期のみ関わる働き方など、多様な働き方を受け入れるまちを望む声が出された。
観光・移住を地域の若返りにつなげる仕組み	・ 戸倉上山田温泉への期待、老朽感・レトロ感、外から人を受け入れる環境の地域差が挙げられた。 ・ 観光地を巡る周遊バス、地域で消費される仕組み、伝統の仕事体験、若い人の声を生かすことなど、観光・移住・地域参加をつなげる意見が出された。

E 歴史・文化芸術

歴史文化を知り、誇りにつなげる取組	・ 古墳、日本遺産「月の都」、県立歴史館、北国街道など豊富な歴史文化資源がある一方、市民にとって当たり前になり、十分知られていないとの意見があった。 ・ 総合学習、フィールドワーク、ちくま検定、学芸員の活用などにより、子どもから大人まで歴史文化に触れ、誇りを持つことを求める声が出された。
地域資源を観光・交流に生かす発信	・ 外から見るとすごい歴史文化があるが、生かしていない、尖っていないという意見があった。 ・ あんずの里、温泉、歴史館をつなぐツアー、善光寺など周辺観光地との連携、市民ガイド、PR動画、SNSなど、歴史文化を観光や交流に結びつける取組が求められた。
祭り・食文化・温泉文化の継承	・ 祭りの担い手不足、守りたい祭り、知られていない食文化、温泉文化に関する意見が出された。 ・ 食文化を学び楽しめる体験、若い人向けの新しいストーリーづくり、温泉文化の発信など、詳しい人も詳しくない人も楽しめる文化のあり方が求められた。
文化財・景観・空き家の活用	・ 北国街道、歴史的建物、空き家、映画の撮影スポットなどの活用可能性が挙げられた。 ・ 文化財を活用した宿泊施設、聖地巡礼、空き家や古い建物の保存・活用など、歴史文化をまちの魅力や滞在につなげる意見が出された。

F 自然との共生・循環型社会

あんず・棚田・身近な自然の継承	・ あんずの里、棚田の生き物、山並みなど、身近な自然の豊かさが強みとして挙げられた。 ・ 一方で、あんずを育てる人や田畑の減少、保全活動の担い手の高齢化が課題とされた。 ・ オーナー制度、子育て世代の保全活動参加、小中教育との連携など、自然を次世代につなぐ取組が求められた。
公園・緑地を生かした遊びと地域活動	・ 公園が少ない、遊具が古い、地域行事が減っているとの意見がある一方、公園や緑地を地域活動に活用したいという声があった。 ・ トンボ池周辺の整備、大池キャンプ場のPR、自然と共生できるアスレチック、全天候型の公園や運動場などを求める意見が出された。
ごみ出し・環境美化と地域のつながり	・ ごみ出し当番に係る若い世代の負担や通学時間との重なりが課題として挙げられた。 ・ 一方で、きれいなごみ出しや、あいさつ・会話が生まれる地域コミュニケーションの機会にもなっているという意見があり、負担軽減と地域のつながりの両立が求められた。
有機農業・家庭菜園・森林整備の推進	・ 田畑の減少、森林整備、クマ出没への対応などが課題として挙げられた。 ・ オーガニックビレッジ、有機農業、家庭菜園講座、畑をやりたい人と持っている人のマッチング、森林整備など、循環型の暮らしと環境保全を結びつける意見が出された。

② 主な意見のまとめ

G 市民協働・地域活動

地域行事・住民自治の継続	- 近隣住民同士の距離の近さや地域ごとの文化がある一方、担い手の高齢化や行事の減少が課題として挙げられた。 - 地域行事の情報共有、地区ごとの取組の一元管理、人口減少を前提とした「やめる・減らす・まとめる」見直しなど、無理なく続く住民自治を求める意見が出された。
新しい人・若者・子どもが関わりやすい地域	- コミュニティが完成していないため新しい人が入りやすいという意見がある一方、移住者への目線の厳しさも指摘された。 - 移住者と既存住民の歩み寄り、中高生の地域参加、大学との連携、企業の地域貢献など、新しい人や若者が関わりやすい地域づくりが求められた。
子育て支援と地域の支え合い	- 子どもカフェや空き家を活用した子どもカフェ、子ども支援事業が挙げられ、子育て環境の良さを評価する意見があった。 - 一方で、ひとり親家庭の経済面・子育て面の不利さも課題として示され、地域で子どもや家庭を支える取組の継続・周知が求められた。
誰もが尊重され、活躍できる地域	- 性別による役割分担の固定化、男性の育休取得のしづらさ、前時代的な価値観への問題意識が出された。 - 女性だからではなく個人としての登用、男性の育休取得、働き方改革など、男女関係なく活躍し、お互いを尊重できるまちを求める意見が出された。
行政サービスと情報共有の改善	- まちナビちくまの認知の低さや、地域情報の共有不足が課題として挙げられた。 - 行政サービスのオンライン化、地元住民が発信できる掲示板、各地区の行事情報の一元管理など、市民が情報にアクセスしやすく、行政負担の軽減にもつながる仕組みを求める意見が出された。